OMC News 大阪ムービーサークル

ＯＭＣ事務局　〒565 豊中市上新田 4-16-1-33　合原一夫　TEL06-833-9227
広報編集局　〒573 枚方市三栗 1-18-20　前田茂夫　TEL0720-50-5781

平成９年４月(1997年)　Ｎｏ．３７６

ＯＭＣ撮影会は浜松の凧揚げ合戦に決定

ＯＭＣ恒例の撮影会は、少し遠いですが日帰りで浜松まつりのメーンイベントとして催される「凧揚げ合戦」にしました。これは毎年５月３、４、５の３日間に亘って行われている浜松最大の行事で、大きな物は４メートル四方もあるという大凧を20～30人位の若者がラッパの音に合わせて勇壮に操り、相手の糸を切り合う合戦がみものです。もっとも風が強いときは小振りの凧に切り替えるなど、いろいろの大きさの趣向をこらした大凧を各町内ごとにいくつも用意して合戦に臨むようです。作品のまとめ方は動きの激しい被写体と近くの日本三大砂丘の一つの中田島砂丘がひろがる場所だけに、いろいろ多彩な作品構成が考えられましょう。皆さんの多数のご参加をお待ちします。申し込みは会長まで。

記

１．撮影日時　：５月５日（子供の日）
２．行き先　：浜松市中田島砂丘、凧揚げ会場
３．集合場所、時間：新大阪駅24番ホーム、３号車付近に７時５０分迄に集合こだま402号8時発（始発のために空いています）、禁煙車希望の方は２号車へどうぞ。浜松着10時5分。なお8時24分発ひかりで行かれる方は浜松に3分前に着きますので、３号車付近でこだま402号の到着を待ってください。ただし浜松停車はこれしかないので、座れるかどうかわかりません。なお解散は5時頃浜松駅予定。夜の撮影は自由。
４．参加費　：２，０００円（ラッパと掛け声ＳＥ、凧揚げ音頭のテープ、トロフィー、連絡費など）
５．交通費、食事代は各自負担（交通費はバス代とも往復約1.7万円）
６．駅弁など要準備

３月例会のレポート

桜便りも聞かれるようになった３月例会、外はあいにくの雨とあって、常連

諸氏の集まりはいまひとつだったが、新しい方や見学者のお顔もあってまずまずの例会となった。今月の司会は有村氏、書記は関氏、デッキ係は岡本氏欠席のために藤原氏へお願いして会は進行した。司会によると、ソニーから近くPC7に代わる小型デジタルカメラが発売されそうだと紹介があった。待っててよかったとの声も。合原会長より撮影会の件が発表された。　（合原記）

■出席者：合原、森、花岡、江村、有村、関、藤原、安居、安居(良枝)、前田、松本、増池、奥、中尾(見学)以上１４名(敬称略)
■上映作品（今月の記録と講評担当：関　剛氏）

１、たのしい英会話　花岡汗さん　6分40秒

八尾市の生涯学習センターで英会話を学ぶ人々のある日の記録です。生徒には現役を退いた方が多いようで、作者ご自身もこのグループのお一人。しかし学習室の中での会話はなかなかのもの。まったく英語が話せない私などが拝見すると羨ましいかぎりです。ナレーションもご本人が語っておられ（ただし日本語）たいへんお上手です。後半はグループの親睦旅行。学習室から飛び出せばどんなに英語が弾むのか期待していたら、なんと、せんぷ関西弁でした。やっぱり馴れない言葉を一日中話すのは肩がこるのでしょうね。余裕の人生を楽しんでおられる様子がこの作品でよく分かります。

２、阿修羅　安居利次さん　6分20秒

奈良・興福寺の国宝、阿修羅像を他の阿修羅と対比させながら、その本質を追及しておられます。対象物の性格上、絵や写真で作品が構成されてありますが、部分的アップを多用しながら丁寧なナレーションで阿修羅に対するご自分の主観を淡々と語られています。歴史ものや古代遺産をテーマにするとき、撮影、編集のほかに、調査や資料の収集といった作業がつきもの。それだけ余分な労力をかけているにもかかわらず、見る側にはあまり印象に残らないという現実があります。この種の作品には年代とか人の名前がいくつも出てくるナレーションは欠かせません。しかし、耳から入る情報の中に数字や固有名詞の羅列があると、終った時点でその内容も一緒に忘れてしまうのが普通です。
歴史や遺産を語ることは、苦労な割にそれほどの感銘が得られない損な一面をもつ分野です。

３、化野　安居良枝さん　3分35秒

化野は、ひと昔まえまで観光客もほとんど足をはこばない京都の田舎でした。念仏寺もたまに私たちが訪れると「よくぞお参りいただきました」と喜び、撮影はもちろん三脚を立てることも自由でした。今は厳しく規制されてしまい隔世の感があります。安居さんはそんな制約のなかでも実によく撮られていると思います。ポピュラー音楽のなかの演奏とコーラス部分にあわせて映像に変化をつけたということですが、それは映写後の説明があって初めて納得できたことで、残念ながら作者の意向が直ちに伝わっていません。
要するに映像の中身とカッティングの問題だと思います。仮に演奏を「強」とし、コーラスを「緩」にしましょう。強いところの映像はすべてアツアで短いカットを積み重ね、緩いところは思いっきりロングで比較的長めにするという編集テクニックが要ると思います。
しかし対象物は石灯篭や石仏。果たしてリズミカルな編集がなじむかものか、

ちょっと計りかねます。

4、久美浜の朝　　江村一郎さん　　3分15秒

静かな海岸風景で早朝の雰囲気はでています。いきなり獲物を狙っているような蒼鷺のアップで始まり、あとに何か期待感をもたせましたが空振りでした。かきの養殖場らしいのですが映像の追及がありません。決定的なカット不足です。

5、奈良冬景色　　有村博さん　　5分10秒

この冬は雪景色を狙っていた人には幸運でした。有村さんも勝手の知った奈良に飛んでいったようです。人ひとりいない奈良公園。動くものは鹿だけという風景も珍しいのですが、もう少し鹿を迫っていってもよかったのではないかと思います。絞りにかなり神経を使われたと見えますが、結果的にオーバーなところがたくさん出来てしまいました。

6、天神社・どんど祭　　合原一夫さん　　16分30秒

合原さんがお住まいの上新田は、高層マンションが建ち並ぶ千里ニュータウンのなかにぽつんと開発から残った古い家並をもつ一角。いまも昔ながらの伝統が受継がれていて、それがこの地区に住む人達のよりどころになっているのかも知れません。作品は年々難しくなってきたとんどの材料集めのシーンから始まります。とんどは真直ぐにのびた松を芯に、まわりを円推形状に竹で囲み、それに藁束をかさねるというもの。輪番制の世話人のインタビューのなかにもその苦労話が聞かれます。
世話人の活躍を中心に作品は進行します。とんどの作り方や構造なども映像とナレーションでわかり易く説明されていて、合原さんの几帳面さが画面からもよくわかります。クライマックスはとんとが燃え盛るシーン。ここにアップが少ないのが惜しいですね。

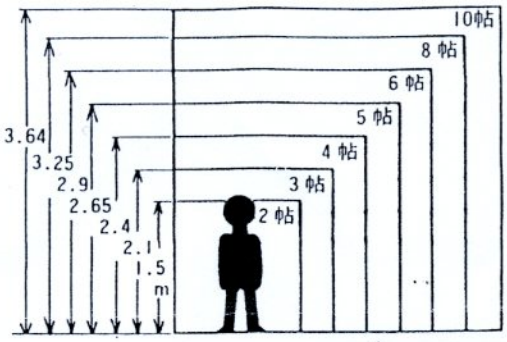
7．ヴェネツィアのカルネヴァーレ　　関　剛さん　　18分30秒

西洋には変わったお祭りがあるものです。普通カーニバルといえばパレードが付き物。しかしヴェネツィアでは、人それぞれの仮面をつけ、手作りの豪華衣装を着て、ただ街を練り歩くだけです。たいへんエキゾチツクで面白いのですが、それが故につい長くなり、最後はだらけてしました。１２～３分がいいところでしょう。

４月例会のお知らせ

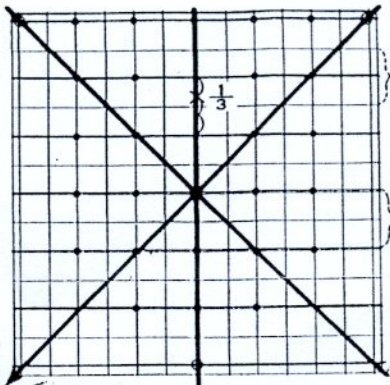
４月例会は第４土曜日２６日１８時より、阿倍野市民学習センター（あべのベルタ３階にて）。暖かくよい気候です。月１回の楽しい例会に是非ご出席下さい。作品の方もよろしく。今月は会費納入月です（半期５千円、１年分もも歓迎）よろしくお願いします。

凧の大きさ



ふつう使用される凧は２帖か
合戦には４帖から６帖が最も
風のあるときは小さな凧、風の
は大きな凧を揚げる。
（用紙は美濃紙で「たて30セ
ヨコ33センチ」の紙12枚を１帖）

凧の骨と糸目



糸目の焦点
親　糸
子　糸
目の長さ＝凧の３～５倍

尻尾骨

子骨は根と先の方を交互に組んでいくこと。

竹の直径は成人者の親指の太さ位がよい。

遠州路の風物詩

浜松まつり凧合戦の歴史

浜松の凧揚げの起りは古く、江戸時代の元文４年(1739年)酒井真邑の著によれば、今から、およそ435年余り前の「永禄年間(元年～８年の間に)飯尾豊前守殿居城、この子孫曳馬野に住する也。引馬城主、飯尾豊前守殿の長子義廣の誕生を祝して…入野村の住人佐橋甚五郎の発案で、凧の大なるものに、御名義廣と記し城中において揚げ奉る」と記されている。

引馬城(後の浜松城)近くより城の上空高く、義廣公名入りの大凧を揚げ御誕生を奉祝したことに始まる。このようなことから浜松では昔から「初凧」ととなえ、長男が生まれると町内の若者達が端午の節句に祝い凧を贈って揚げるという、長い間の風習があったもので、この民俗行事は日本の遊戯が盛んになってきた江戸時代中期以後に普及されたものであろう。

凧絵については江戸時代は菊水、雲に鶴などであったが、明治から大正にかけては各町名を現わす絵、字に変ってきた。むかしは凧揚げ場で一ヶ町が揚げていると、他町からきて挑戦したもので、しだいに組織化され、旗をおしたて、そろいの法被、手ぬぐいで凧合戦競技を行なうようになった。

浜松の、お囃子と屋台のはじまりは、むかし凧合戦が終ると荷車に凧や道具を積んで帰ったが、明治の末、当時の名優森三之助は一座を連れ、凧揚げから帰る若衆を鐘や笛、太鼓の鳴り物入りで迎えた。これが浜松の、お囃子のはじまりである。また屋台は、お囃子より少しおそく、はじめは通称大八車。たる木柱を立て凧糸を張り、提灯や木花で飾って、糸わく、凧をたてかけ大八車に引き紐を輪に付け、子供達が輪の中に入って、ワッショイと掛声勇ましく凧会場から曳いて帰ったのが浜松屋台の始まりと云われる。大正４年には底抜け屋台(浜松独特)が、そして大正11～12年頃から、お囃子連が乗れる屋台になり昭和と時代が進むにつれ、御殿づくりの豪華な屋台となり、夜の市内は眼もまばゆい不夜城を現わし、数10万人の観衆でうめつくされてしまう。